令和６年度 日本大学文理学部個人研究費　研究実績報告書

所属・資格　　社会学科・助手

申請者氏名　　吉村　さやか

<table>
<tr><td colspan="2">研　究　課　題</td><td>ルッキズムとジェンダーに関する社会学的研究（3）:「見た目問題」当事者とその家族への聞き取り調査から</td></tr>
<tr><td rowspan="3">報告の概要</td><td>研究目的および研究概要</td><td>本研究の目的は、「見た目問題」当事者への聞き取り調査を通して、当事者男女それぞれの問題経験に、ルッキズムとジェンダーがいかに影響しているのかを明らかにすることにある。
申請者は 2012 年以降、当事者の会で参与観察を行い（現・NPO 法人円形脱毛症の患者会、NPO 法人マイフェイス・マイスタイル、日本アルビニズムネットワークなど）、会の活動を通して出会った当事者とその家族を対象に生活史の聞き取り調査を行ってきた。彼／彼女たちは先天的・後天的なけがや病気によって、外見が「ふつう」とは異なる身体をもつ。本年度も継続して調査を行いながら、ラポール形成に努めつつ、個々人の生活史を丁寧に聞き取る。その作業を通して、当事者の多様性に着眼しながら、彼／彼女たちの問題経験をより網羅的に把握するとともに、男女それぞれの問題経験にルッキズムとジェンダーが具体的にどのような影響を及ぼしているのかについて明らかにした。</td></tr>
<tr><td>研究の結果</td><td>今年度は、当事者男女とその家族 38 名にライフストーリー調査を実施した。調査協力者の年齢は 10 代～60 代で、男女比は 2:3 であった。質的調査を通して、当事者の問題経験にジェンダーが与える影響は、とくに、発症年齢とその年代、家族構成、居住地域によって大きく異なることが確認された。</td></tr>
<tr><td>研究の考察・反省</td><td>質的調査（インタビュー調査）の長期化により、当初予定していた量的調査（アンケート調査）を実施できなかったため、より網羅的な調査の実施を、今後の課題としたい。</td></tr>
<tr><td colspan="2">研究発表
学会名
発表テーマ
年月日／場所

研究成果物
テーマ
誌名
巻・号
発行年月日
発行所・者</td><td>※この欄は，本報告書提出時点で判明している事項についてご記入ください。
【研究発表】
・吉村さやか「自著を語る～MY FIRST BOOK～（1）『髪をもたない女性たちの生活世界―その「生きづらさ」と「対処戦略」―』（生活書院、2023 年）」第 75 回 関西社会学会大会／2024 年 5 月 25 日／大和大学
・――――「『髪をもたない女性たちの生活世界―その「生きづらさ」と「対処戦略」―』（生活書院）の著者に聞く。」第 67 回 化粧文化研究者ネットワーク研究会／2024 年 7 月 6 日／資生堂汐留ビル
・――――「若手研究者にとって「投稿」とはいかなる経験か」第 97 回 日本社会学会大会／2024 年 11 月 10 日／京都産業大学
・――――「生きる力としての社会学―外見差別と日常性批判を中心に―」摂南大学現代社会学部 FD 企画講演会／2024 年 12 月 9 日／摂南大学
・――――「外見差別の社会学―現状と展望―」摂南大学現代社会学部 FD 企画講演会／2024 年 12 月 9 日／摂南大学
【研究成果物】
・吉村さやか「査読を通して変化した当事者研究のパースペクティヴ」樫田美雄・栗田宣義編著『社会学者のための 論文投稿と査読のアクションリサーチ』新曜社／pp.121-142／2024 年 5 月 2 日（分担執筆）
・――――「どうやって母親と対話できるようになったのか―彼女と過ごした最期の 14 カ月を通して―」好井裕明・宮地弘子・石岡丈昇・堀智久・松井理恵編著『ボーダーとつきあう社会学―人々の営みから社会を読み解く―』風響社／pp.297-310／2024 年 11 月 20 日（分担執筆）
・――――「日大好井ゼミ―“アウェー”から“ホーム”、そしてその先へ―」好井裕明・宮地弘子・石岡丈昇・堀智久・松井理恵編著『ボーダーとつきあう社会学―人々の営みから社会を読み解く―』風響社／pp.439-441／2024 年 11 月 20 日（分担執筆）
・――――「書評リプライ　反省と今後の課題と展望―西倉氏の書評に応えて―」『障害学研究』21 号／pp.247-250／2024 年 11 月 15 日</td></tr>
</table>